



# 雪の大ぼうけん

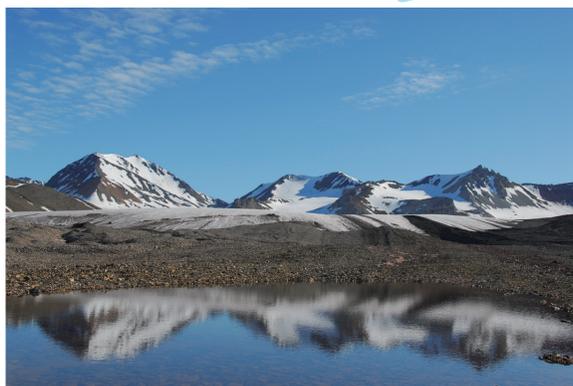
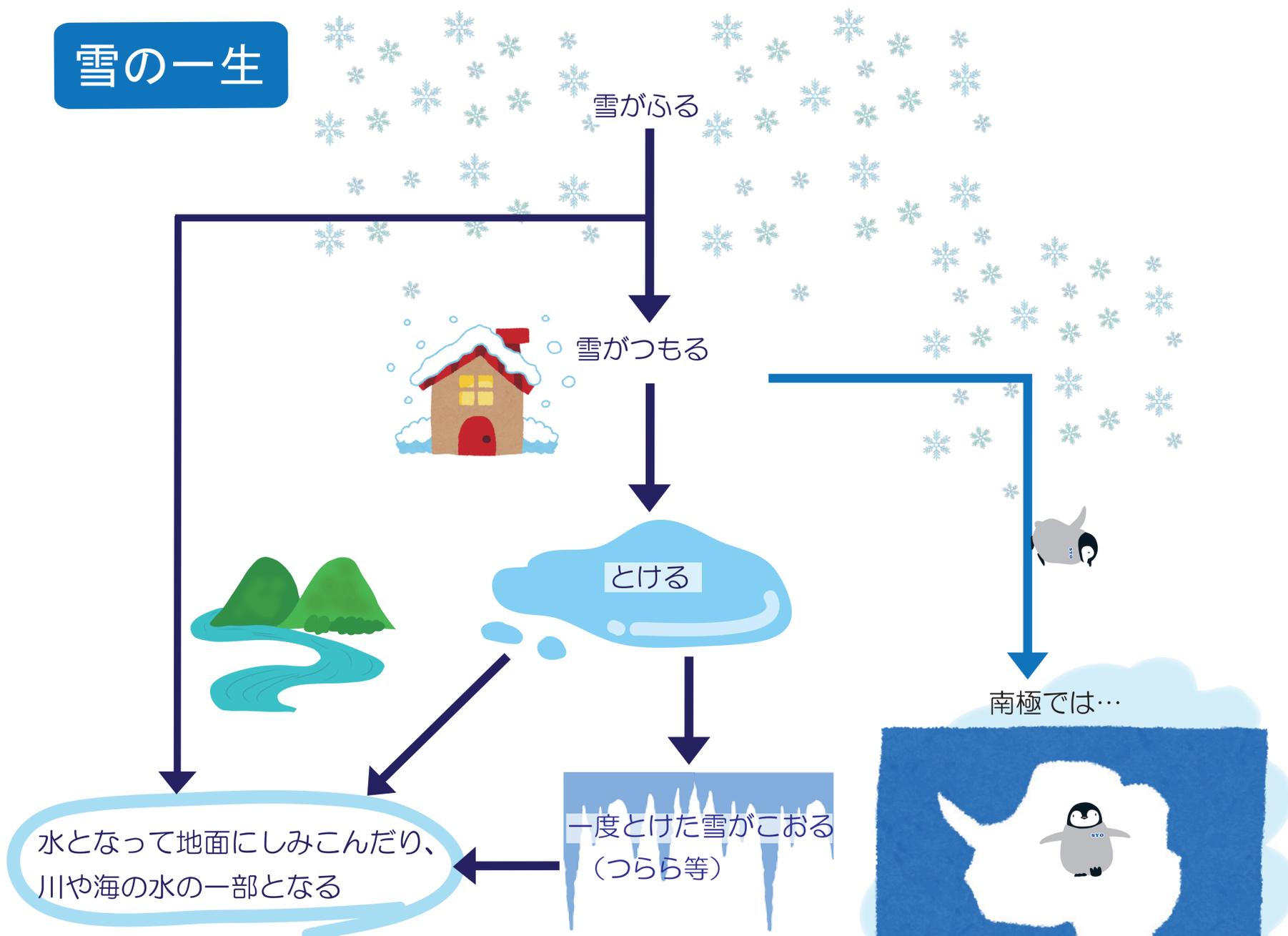


空気中の水蒸気<sup>すいじょうき</sup>が上空で冷やされてできた「雲」。その雲から、氷の結晶<sup>けっしょう</sup>となって落ちてくる「雪」。雪は、気温と水分の量で形を変えます。大きな雪の結晶ができるのは気温が高く、水分の量が多いときです。

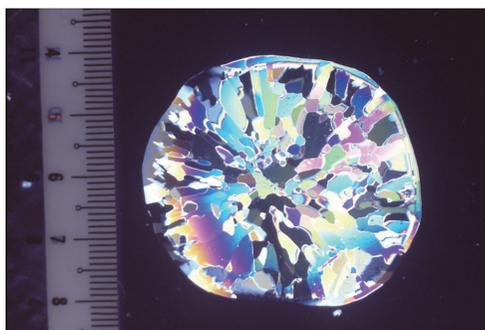
気温が0℃より高いとき、雪は一部がとけかかっている状態<sup>じょうたい</sup>です。東京にふるのは、主にこのとけかかった雪で、結晶が大きい<sup>けいけん</sup>ため、結晶どうしが次々とくっついて「ぼたん雪」などと呼ばれます。着ているコートに雪がたくさん付いて困ったという経験<sup>けいけん</sup>のある人も多いのではないのでしょうか。

気温がとても低いときは、水分が少なく、サラサラとした雪になります。南極の内陸では、気温が低く水分も少ないので、とても細かい氷晶<sup>ひょうしょう</sup>（0.1～0.001 mm、ダイヤモンドダストと呼ばれます）がふります。氷晶<sup>ひょうしょう</sup>やそれから成長してできた雪が積み重なり氷となって厚い氷床<sup>ひょうしょう</sup>となるのです。

## 雪の一生

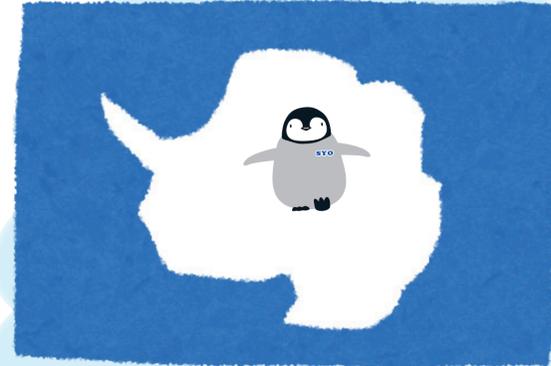


【北極の雪どけ】



【つららの顕微鏡写真】

つららを横にうすく切り、偏光顕微鏡<sup>へんこう</sup>で見たものです。



ふりつもった雪がつみかさなり、押しつぶされて、深さ50～100mで氷に変わっていきます。これが氷床になります。